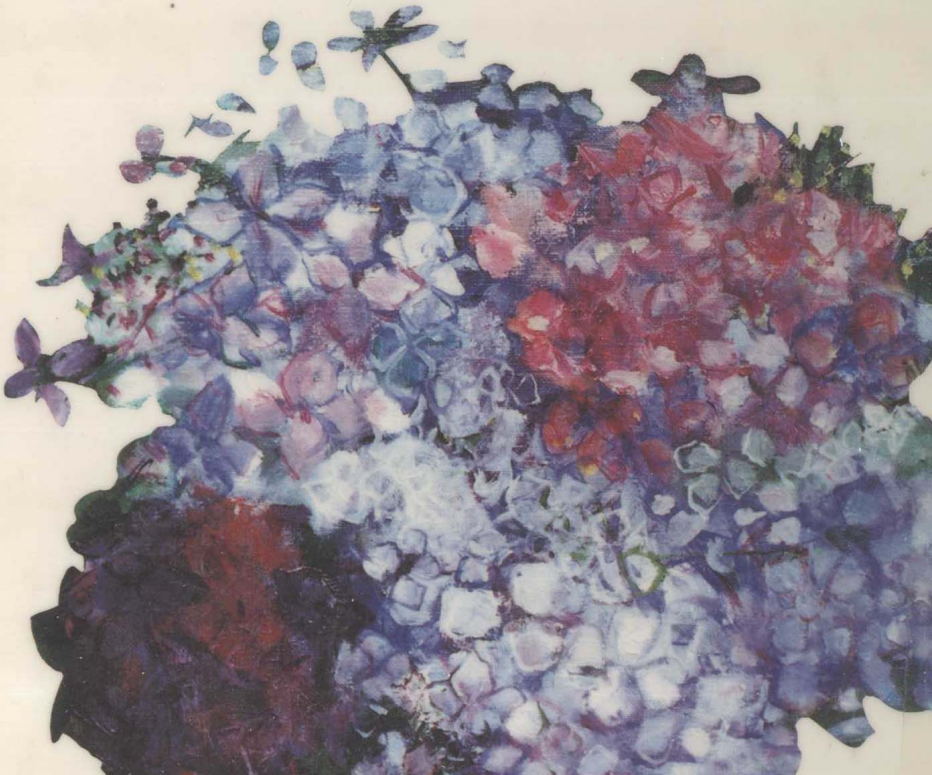
高校生への手紙 第二集

ある学級通信

門脇一生著

地歴社



高校生への手紙

ある学級通信

第　二　集

門脇一生著

地　歴　社

著者略歴

1924　東京都港区芝に生まれる
1941　旧制暁星中学校卒業
1948　慶応大学経済学部卒業
1951　東京大学文学部卒業
1951　中野区立第四中学校に勤務
1960　東京都立石神井高校に勤務　現在に至る
全国民主主義教育研究会会員

編著書

『高校生への手紙』第一集　地歴社
『学習資料　倫理』(共同執筆)全民研編・ほるぷ教育開発研究所刊
文部省検定教科書『倫理』(共同執筆)実教出版
『高校「現代社会」をどう教えるか』(共同執筆) 地歴社

高校生への手紙——ある学級通信——第二集　**定価1200円**

1983年12月10日初版第1刷発行

著者　門脇一生

発行所　地歴社
東京都文京区本郷三丁目21—11(〒113)
電話　03(815)4439

はしがき

『高校生への手紙—ある学級通信』（一九七九年）以後書き続けてきたものが大分たまったので、また、まとめて本にすることにした。まとめるに際して数編を削除し、文章をわずかながら修正した。

本書は前著の続編であるが、すじがき上のつながりはなく、文章の調子も、前と若干変わってきているように自分でも思う。また題材も前ほど学校生活に即した具体的なものでなくなり、抽象的で理屈ぽいものがふえ、また、昔を語る回想風のものが多くなってきているように思う。前者の最初の文章を書いてから十年以上の月日がたち、ものの考え方もいやおうなしに変わったのである。このことについては、「学級通信」の一人であった内田理之君の『空想対話』という文章がその印象にふれている。この文章は、本書の刊行に際して、同君から特に寄せられたものである。

本書におさめた文章は、ホーム・ルームの生徒にあてたもののほかに、授業に出ているクラスの生徒にあてたもの、卒業生、教師をめざす大学生、父母にあてたものなどを含んでいる。その

類別は巻末の「解題」がしるすとおりである。

生徒へのコミュニケーションの方法として、年来このようなスタイルをとるようになってきたのは、結局は、私の性に合ったやり方であったからである。一般にいわれている学級通信と趣を異にしているかもしれないが、呼称はどうでもよい。ともかく、なるべく嘘をいわないように、建前をつくらないように、気持のありのままを一人ひとりの生徒の心の奥にとどけようと心がけてきた。また、プリントにして配りはするが、読む読まないは生徒の自由、と思ってきた。書く以上は読んで欲しいし、文章も時間のゆるすかぎり推敲(すいこう)する、読者の反応があればたいへん嬉しい。しかし、この種の文章を書くについては自己満足的な気分を味わうことができるので、たとえプリントが生徒の手に渡った途端に紙飛行機になったとしても、そう気にしないですむ、というくらいの気持はあった。

欲目もあるかもしれないが、生徒たちは割合よく読んでくれたのではないか、という印象を持っている。プリントが生徒から父母に渡り、父母から反応があったこともあり、また職場の同僚から感想や批評を聞くことも時々あった。

こうして本にまとめることができるまでに、職場の諸先生、全国民主主義教育研究会の諸氏、PTAや地域の父母の方々から多くのご教導や示唆を得たことについて深く感謝する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

表紙については、前回同様、小川幸江さんから美しいあじさいの絵をご提供いただいたことにつき、深く謝意を表したい。
また、生徒にプリントを配布する段階で、いつも印刷の労をとって下さった石神井高校事務室の戸田久子さんに御礼申し上げる。
なお、本文中のカットに用いた面影人形は、妻、ます恵の製作、撮影によるものであることを付記する。
前著『高校生への手紙』とともに本書の発行をひき受けて下さり、編集その他の上で有益な御教示をいただいた地歴社社主、大村健五氏に心から謝意を表する。

一九八三年十二月

門脇　一生

目　次

はしがき　七
死ではなく生に向かって　一一
継続ということ　一五
父母の出会い（一）～（三）　二三
いつのころからか　二六
心の小道　三〇
嫉妬について　三四
夏休を前にして、君へ――　三八
今、この時期に（一）～（二）　四五
勉強の思い出（一）～（七）　七〇
最後の最後までベストを尽くそう　七三
今年の正月　七六
人間の尊厳をめぐって

みえない通信箋　八〇
キラキラするもの（一）～（三）　八四
別れの朝　九五
回想の浪人生活（一）～（二）　九八
進路断想　一〇四
心の故郷　一〇七
時の流れが――　一一一
今日の新聞から　一一四
川は知っている　一一六
「かくし味」――修学旅行を前に――　一一八
浪人のみなさんへ　一二二
星を仰いで　一二六
新しい年へ　一二九
友人　一三一
旅日記　一三五

雑誌と私　一四五
旅について　一四九
読書の思い出（一）～（六）　一五二
罪を犯した女　一七六
自由課題 ― 一市民の感想　一七九
読書会の感想――『高校生への手紙』をめぐって　一八三
蛇の話　一八五

別編

倫社雑感　一八八
教育をめぐって（一）～（二）　一九一
生徒の質問に――（一）～（二）　一九九
どうして先生に…（一）～（二）　二〇六
教師断想　二一三
空想対話　……　内田理之　二一七
解　説　二二一

死ではなく生に向かって

私は、自殺しようと思ったことはない。また、私の直接の知人で自殺したこともない。生まれおちてから今日まで、平均的な苦労やゆきづまりは、けっこう経験してきたのではないかと自分では思う。とくに、そのうちの一定期間は、いろいろのひとから「門脇さんも苦労しますねえ」といわれたし、自分でも、なんでえりにえって自分が、こんな運命の星の下に生まれたのだろう、と天に向かってなげいた。しかし、自殺しようと思ったことはなかった。十代の終り、二浪したあと、旧制浦和高等学校—埼玉大学の前身の受験に失敗し、発表をみての帰り、京浜東北線の電車で荒川の鉄橋を渡ったとき、その車輪のカタン、カタンという音と、窓外の早春の闇が、自分に死を誘っているように感じられた、漠然とした記憶がある。しかし、それも感傷にすぎなかった。

戦後、数年たったころ『或る若き哲学徒の手記』という名の書物が学生のあいだにもてはやされた。手記の筆者は京都大学哲学科出身の学生である。かれは、学徒兵として従軍中、カントの『実践理性批判』をかくしもって愛読し、敗戦とともにソビエトに抑留されたが、やがて帰還をゆるされて船で日本海を渡ってくる途中、機雷に触れて船もろともに死んだ。機雷が爆発して船

が傾き、乗客が先をあらそって脱出しようとするとき、かれは、微笑して順をひとに譲ったとのことである。かれは、カントのいう「うちなる道徳律にたいする心からの服従」の模範を、身をもって示したわけであった。このような書物が学生、青年のあいだにもてはやされたという事実自体が、いまの青年の意識状況と当時のそれとのちがいをあざやかに示していて、興味ふかいが、この学徒兵の死は、いわゆる自殺とは意味を異にしている。生きようと思えば生きられるのにあえて死を選ぶことが、積極的な意義をもつ場合があるとすれば、そのひとつは、このような状況においてであろう。そいう死を選ぶことができるということ、そして、一時的な激情によってではなく、静かな決断によってそうすることができうるということは、おそらく人間にとって最高の幸福ではなかろうか、と私は考える。こいう最後を選びうる状況に恵まれるかどうかは多くは偶然によるであろうが、その偶然の事態に処する態度は、そのひとの平常の生活の集中的な表現のほかのなにものでもない。私は、「今の青年の意識状況と当時のそれとのちがい」と書いたが、今の青年のなかにも、この「若き哲学徒」の死にたいして共感するひとが一定数だけはいると信じている。また、「哲学は死への準備である」というプラトンのことばが、現代の私たちになにを語りかけるかについて考えてみようではないか。

劇的な死について論じるまえに、毎日の平凡な生活を、どう意味あらしめるかについて考える

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ことにつとめよう。なぜなら、「小事に忠実な人は、大事にも忠実である。そして小事に不忠実な人は大事にも不忠実である」（『新約聖書』・ルカ伝）であるからである。死は生の完成である。私たちは、死について考えるまえに、生について考えなければならないのではなかろうか。昨今、新聞で報道される青年の自殺が生の完成であるとは、どうしても思えない。

フリー・トーキングのとき、「自殺と孤独とはきりはなしては考えられない」と某君はいったが、このことばは私に、つきささった。自殺者のもつ一種独特のまじめさは、孤独とむすびついている。新聞に自殺の記事が報道されるとき、自殺したひとについて、「内気でまじめだった」「おとなしかった」「無口だった」「友だちがなかった」等のことばが多くの場合語られる。残念なことに、孤独はかなり根ぶかく性格的なものであるが、私は、「孤独」を、死ではなく生に向って、人とのつながりにおける積極的な生に向って、止揚（アウフヘーベン）してゆくことが、けっして不可能ではないと信じるものである。というのは、私自身、そのような性格のもち主だからであるから、いっそうの真実味をもって、みなさんのなかにもかならずいるであろう少数の孤独な人間の、そのひとりひとりの心に直接よびかけるような気持をもってこう言うのである。

「日本自殺防止協会」という団体があって、自殺一歩手前のひとに向って、ぜひ電話をかけるように、と、その電話番号を宣伝している。その電話番号は［二六三―四三四三］である。人間

にとって、心と心の対話がどんなにたいせつなものであるかということ、また、そういうことを痛感し、不本意な死におちこんでゆこうとするひとをひきあげようと、組織的に活動している人びとがこんな世のなかにもいるということを知ってほしい。幸というべきか、不幸というべきか、この電話は非常によく利用され、また、効果をあげているそうである。

「自殺は最後の自由である」というような考えには、私はくみしない。むしろ、自殺は、他殺とおなじレベルの罪悪である。ただ、殺害者がとがめられないというだけである、と私は思う。

（一九七九・二・二五）

継続ということ

『蘭学事始』ならぬ勉強ことはじめ――こういった感じで、新しい三年の生活をスタートするひとがかなり多いのではなかろうか。石神井高校はのんびりしている、ということを、生徒も父母も教師もいう。「どうせみんな浪人するんだから、ぼくも」と生徒はいい、親や教師は「ぜったい浪人しないつもりでやれ」などという。しかし、あと一年たらずで本番はかならずやってくる、このへんで、心機一転しなければ、というあたりが、大方のひとの気持ではなかろうか、と推測するが、どうであろうか。そこで、今日は、勉強ということをめぐって書くことにしよう。

勉強でなによりたいせつなのは、継続ということである。よく父母会などで、お母さん方から「どうもうちの子は勉強のしかたがわからないらしいのですが」とか「勉強の要領を教えてくださる方がいるといいのですが」などということばをきく。しかし、ぼくは、こういう観察は実態を正確にとらえていないような気がしてならない。要は、勉強していない、ということにつきるのではないか。勉強してみなければしかたも要領もわかるものではない。継続して勉強しているうちに、そういうものは、自然と身についてくるものである。

継続という場合、五時間も六時間もの猛烈な勉強を何カ月もつづけなければならないなどというのではない。勉強を時間ではかること自体が問題だが、ある科目について毎日一時間でも三十分でも、または二十分でもよい、ともかくつづけてみることである。ちりもつもれば山となる、というが、学力は生活のなかに織りこまれた習慣的勉強をとおして、おもむろに安定した、後退不能の成長をとげるのである。

わかものは、しかし、とかく短気だ。ぼくも、昔、短気だったからよくわかるような気がする。たとえば、薬なども、一日一錠ずつのむ薬を、いっぺんに五錠も六錠ものんで、その分だけはやくなおそうなどとしたものである。参考書やノートなども、すこし使っては思うようにちからがつかない——ような気がする——と、別のものにとりかえ、また、ひとのうわさやちょっとしたひとことで、さらに別のものにとりかえる、などということをいやというほどしたものである。参考書を勉強するというより、参考書のよしあしに迷ったり、本屋めぐりでエネルギーを浪費したのである。

勉強は継続であるということ、ことは平凡であっけないほどのものだが、実は、これがひどくむずかしい。この平凡な結論に落ち着くまでに、たいていのひとは、左を見、右を見、「秘訣」とか「要領」とかいうことばにまどわされるのではないか。天才とは、努力なしにひらめきで凡人

のなしえないことをなすものであり、自分にもそういうものが潜在しているのでは、という気のしないひとはむしろすくないだろう。というのは、ぼくもそうだったから。しかし、継続的努力をしない天才は、歴史上、まずひとりもいなかったし、むしろ継続的努力のできること、またはむしろ、せざるをえないこと、が天才のひとつの特徴であるといってよかろう。「ひとつ」というのは、天才には、それに加えて、不可知の生得的な、なにものかがありそうに、ぼくには思えるからである。世のなかに天才とよばざるをえない人間的現象があるということは実に面白い。そしてそういう天才が、また、われわれとかわらぬ凡俗な一面をもっていることにおどろかされ、また、安心する。

ともかく、継続による微少なるものの長期の蓄積こそ学力をかたちづくる。継続によって、きらいな教科にも一定のなじみができ、抵抗がなくなり、その教科の存在する意味や価値にあたたかい理解をもつことができる。まことに、知ることは、愛することである。また、継続のなかで、勉強の秘訣(けつ)や、要領を自分なりにあみだし、勉強を効率化してゆくこともできる。秘訣や要領は、こうして、そのひと個人に所属するものであって、かんたんに授受できるものではないことを知らねばならぬ。

さて、継続、継続といったが、一夜漬けだってしかたないこともある。また、一夜漬けで勉強

して試験が終ったらすぐ忘れちゃった、などとよくいうが、実は、そう忘れるものでもない。一夜漬けでも、やるならやるでしっかりやればよい。ただ、一夜漬けは、勉強の正道とはいえないだろう。ともかく、勉強を漬けものにたとえるとはおもしろい。ほんとによい漬けものができるのには、ながい時間がかかるのであって、勉強には継続こそたいせつであるというのと、よく符合するのである。

（四・二〇）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com